近況レポート

ありがとう！「みんなで守ろう！海わたる鳥」展

文・写真　加賀 まゆみ（夢洲生きもの調査グループ）

夢洲では、今年も残された湿地にセイタカシギが繁殖している。しかし秋にはそこにも水が投入され、水深150㎝程度の万博会場の「つながりの海」になる予定である。秋シーズンのシギ・チドリの渡来は望めない。私たちが調査に入っていた4年間、夢洲にはどれだけの生きものたちがいたのか、少しでもみなさんに伝えたいと考え、昨年度は「夢洲の生きものたちの記録」と題する巡回写真展を7会場で開催し、延べ217日間で10万人を上回る来館者を数えた。

そして、今年2024年5月11日から19日の8日間（13日は休園日）、天王寺動物園のホールにて、今度は他団体も巻き込み、合同写真展「みんなで守ろう！海わたる鳥」を開催した。夢洲に来ていた渡り鳥たちを守っていくには、今後大阪湾岸全体で守ることを考えていかねばと思ったからである。

合同写真展では、昨年度から一緒に調査や行政との面談を持つようになった野鳥の会大阪支部、NPO共生の森の寺川さんやNPO大阪自然史センターの西澤さんは、企画当初から心強いパートナーとして動いてくださった。今回初めて南港野鳥園の協力も得られ、あくあぴあ芥川、和歌山県立自然博物館、高校生の「はねはね団」など、総勢7団体の展示で、教室3つ分くらいの広さの会場がいっぱいになった。中でも寺川さん出展の野鳥の仮はく製は来場者の目を引き、鳥の実物に触れるのは初体験の人も多く大変人気だった。来場者のみなさんは、こんな小さな鳥が何千キロも海を越えて大阪にやってくるという奇跡を実感されたのではないかと思う。

会場では、夢洲の動画や、高田元会長の講演、バードライフインターナショナル・グリメット氏からのビデオレターなどを上映。じっくり見る方、メモを取る方などもいた。また土日は協会会員松永さんがオリジナル脚本の紙芝居「リトルターンの冒険」を上演。毎回多くの子どもたちが真剣に見入ってくれていた。事前準備できなかった地図パネルを初日会場で手書きしていたら、子どもたちが「私も～」と集まってきて、結局みんなで地図の上に絵を描き始め「生きものいっぱいの大阪地図」がどんどん増殖していった。この予想外の展開でとても楽しい空間となった。

外国人旅行客もかなり多く、急遽英語の解説版を用意したりと準備不足の面も多々あったが、他団体のみなさんや多くのボランティアに支えていただき、まずまずのスタートだったのではないかと思う。動物園のお客様というのは「生きものには少なからず興味がある、が、あまり環境には深い関心がないかもしれない」という、これから自然保護へむけての普及活動をしていくにはちょうどいいターゲット層と分析するメンバーもいる。今回の反省点を生かし、さらにいろいろな形でつながりを作り、「みんなで守ろう！海わたる鳥」を続けていきたいと思っている。

ポスターや説明の下には子どもたちの絵が増えていった

紙芝居「リトルターンの冒険」上演風景